

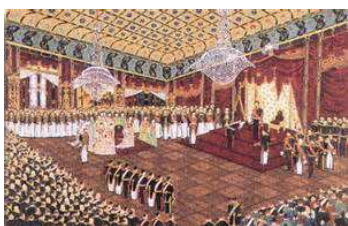
1 「文明開化の鐘」

「作曲者本人を呼んでこようか」なんて言っているときに、わざわざ曲の解説を書くのはとてもチャレンジですが、ここではイメージづくりに（日本史のおさらいよろしく）「文明開化」の様子を紹介します！

1852年、浦賀沖にアメリカ海軍のペリー提督率いる黒船が入港し、鎖国の中にあった日本を大きく揺るがします。その後繰り広げられる尊皇攘夷派と開国派との対立、討幕へ向けたうねりと衝突の末、1867年12月9日（ちょうど今度の演奏会の季節ですね）、京都において王政復古の大号令が發布されます。これは、同年10月14日に江戸幕府15代将軍徳川慶喜が政権の「起死回生」を賭けた大政奉還を仕掛けた（朝廷に征夷大將軍が預かった政権運営をいったん返上し、幕府主導の雄藩連合による政権を画策）のに対し、討幕派の長州・薩摩らが幕府を排除した新政権を確立するために、天皇からの密勅を得て仕込んだ大政治劇でした（「文明開化の鐘」の冒頭 *Grandioso* 部分は、大河ドラマよろしく黒船の来航の様子を想起させますね。因みにこの部分は原曲である金管八重奏版にはありません）。



翌1868年以降、鳥羽伏見の戦いから戊辰戦争を経て明治新政府が誕生、十年後の西南戦争（1877年）に至る武力衝突の収束を経て、自由民権運動の高まり、明治憲法の制定（1889年）へと道が続きますが、



この明治時代の初め20年くらいの時期、国家としての産声を上げた日本の喫緊の課題は、当時帝国主義に基づくアジア進出を続けていた欧米列強に呑み込まれないように近代化を一気に推し進めることでした。黒船の武力を見せつけられ徳川幕府が締結せざるを得なかった不平等条約を改正するためには、日本が軍事・経済・統治制度の総合的な面で強い国となることを

示さなければなりません。歴史の時間に丸暗記で覚えた「富国強兵」「殖産興業」、そして「文明開化」といったキーワードは、こうした列強への危機感から生まれていたといっても過言ではないのです。

ということで、明治の人達は指導層を中心にとにかく勉強をし、蒸気船に乗って海外へ渡航し度肝を抜かれながら現地の風説をつぶさに見聞し、新しい知識を貪欲に吸収していきます。我々が何気なく使っている日本語の漢字熟語も、その多くはこの時期に西洋の近代的な概念を意識していく過程にその源



を発しているものが少なくありません（今では全く使わない古風な言葉も結構ありますけどね）。その意味では、明治時代は日本語に中国・朝鮮から經典などを通じて多くの概念が導入された古代に匹敵する知識革命の時期でもあるのです（その次はきっと第二次世界大戦後でしょう・・・）。こうした意気盛んな、

Best and brightest を自負する雰囲気、*Allegro con fuoco* の八分の六によく表れていますね（因みに *con fuoco* はイタリア語で「情熱を込めて」という意味（もともと *fuoco* は「火」）。いいですか、決して「ルンルン気分」でも「何ちゃら」でもありません・・・）。

明治時代の産業遺産は最近世界遺産に登録されましたが、有名どころでは群馬



県富岡市の富岡製糸場へや、福岡県北九州市の八幡製鉄所→などが挙げられます。前者はフランスの機械による絹製糸技術を導入して全国に工場を展開させるための国営訓練工場、後者は大陸からの鉱物資源を用いて大規模な鉄鋼を生産するための官営工場です。



都市では、洋装、馬車から蒸気機関車、牛鍋（すき焼きの原型）といった食生活、ガス灯に象徴されるエネルギーなどが、市井の生活に入り込んでいきます。西欧諸国の要人を招いて国力を誇示するために鹿鳴館が作られ、舞踏会も行われました。よく考えると、新旧ごちゃまぜという光景だったんですね。一方で農村

では、江戸時代と大差ない社会生活がしばらく続きました。

「ざん切り頭を叩いてみれば 文明開化の音がする」という有名な謳い文句がありますが、新政府から断髪令が出された明治 4 年の頃には、「半髪頭（ちょんまげ）をたたいてみれば、因循姑息な音がする。総髪頭（長髪）をたたいてみれば、王政復古の音がする。ざん切り頭をたたいてみれば、文明開化の音がする」とかいう政府のプロパガンダが新聞に出されたそう（木戸孝允（桂小五郎）の策とか?）。このヘアスタイルは江戸時代には罪人の象徴だったこともあり、実際にみんながざん切り頭になったのは 20 年くらい経った頃（それこそ明治憲法制定の頃）のようです。まあ入れ替わりには一世代かかるんですね。



とはいえ、例えば日本人の平均寿命を見てみると、明治時代は実は江戸時代とほとんど差がなく 45 歳前後で推移しています（数字そのものは新生児の生存率が低かったのが大きく影響）。この頃の偉人伝を見ると、何と多くの前途有望な若者が病気や戦争で夭逝（若くして亡くなること）しているか、と感慨もひとしおです（そういえば最近、結核予防キャンペーンで正岡子規や石川啄木、樋口一葉、滝廉太郎が載っている AC（公共広告機構）の電車の吊り広告を見ました）。中間部の *Andante* では（あれっ、*Adagio* じゃないぞ・・・）、未来や恋愛への甘美なロマン、古き良き故郷へのノスタルジーだけではなく、目の前に開けた新たな世界に勇躍飛び出し、志半ばで倒れた友への切々とした鎮魂の想いも織り込み謳い上げたいところ。

司馬遼太郎の名著「坂の上の雲」の前半で描かれた秋山兄弟と正岡子規の青春が典型的に物語る、若く好奇心あふれる明治の日本。人生の儚さを背中に新しい世界へ挑んでいった日本人。その気風を誇らしく、そして時に感傷と勇み足の滑稽さも交えて物語る言葉、それが「文明開化」なのかもしれませんね。

2 「美女と野獣」(Beauty and the Beast)

まあ、世間のカップルというものは、誰もが溜息をつく美男美女の完璧ペアもあれば、しかしこれはどうしてこういう組み合わせが・・・というケースもないではない・・・。いや、これ以上言うのは止めましょう（人は外見で判断してはいけません）。



「美女と野獣」という言葉は日常では「？」という取り合わせに使われがちですが、世界各地の昔話で、わけあって醜い姿に変えられた貴公子が心優しい美女に遭って本来の姿を取り戻すというモチーフがよく見られます。今回はご存知 1991 年制作のディズニー映画ですが、実はフランスの民話に題材を採っています（1756 年にド・ボーモン夫人(Jeanne-Marie Leprince de Beaumont)が出版したものが有名）。なおこの民

話自体は、1946年にフランスのジャン・コクトー(Jean Cocteau)という作家が手掛けた傑作映画 (*La Belle et la Bête* 邦題はやはり「美女と野獣」) の題材ともなっています。

(1) あらまし

森の奥にある城に住む傲慢な王子の元を醜い老女が訪ね、一輪の薔薇の代わりに一晩の宿を頼むが、王子は冷淡に拒む。するとその瞬間、老女は美しい魔女に変わり、王子と召使いたち、そして城全体に魔法をかけ、王子は恐ろしい野獣に、召使いたちは家財道具に変えられてしまった。魔女はどんな物をも映し出す魔法の鏡と一輪の薔薇を置き消えていった。薔薇の花びらが全部散るまでに王子が「真実の愛」を見つけなければ魔法が解けることはない。



それから十年。街に住む発明家モーリスの娘、ベル(Belle、フランス語で「美しい」の意味ですね)は街一番の美貌の持ち主で、読書と空想が大好き。ベルは街の人々に馴染めず、街一番のハンサムで人気者だが乱暴で下品なうぬぼれ屋であるハンターのガストンの執拗な求婚にも辟易していた。

モーリスが発明大会に出かけた日、愛馬フィリップが父を乗せぬまま戻ってきたのを見たベルは、父を案じて森の奥地の城へとやってくる。モーリスは城の主である野獣に不法侵入者として牢に捕らえられていた。ベルは父の解放と引き換えに自分が城に留まることを申し出、野獣はその条件を受け入れる。



城に残ることになった失意のベルを、蝋燭のルミエール、置き時計の Cogsworth、ポットのポット夫人ら、家財道具に変えられた城の召使たちは快く受け入れもてなすが、ベルは野獣の凶暴な振る舞いに耐えかね、城を飛び出す。吹雪の中で野生の狼に襲われ、間一髪で野獣に救われるベル。ベルは野獣の心の中に残る優しさに気づき、野獣も彼女の優しさに触れ、お互いに心を通わせるようになる。



二人だけの舞踏会を開いた日の夜、父への想いを隠せないベルに、野獣は魔法の鏡にモーリスの姿を映し出させる。行き倒れたモーリスを見て狼狽するベルの姿を見た野獣は、愛するベルの気持ちを思いやり、ベルに魔法の鏡を与えた上で解放する。自分に対するベルの愛情を確かめられぬまま彼女を手放してしまえば、二度と呪いが解けないことを知りながら。

父を助け街に戻ってきたベルは、ガストンが自分の結婚を承諾させるためにモーリスを狂人として精神病院にいれようと企んでいることを知り、激しく彼を拒絶。モーリスの言を証明するために魔法の鏡で野獣の姿を見せるが、ガストンは野獣を殺すべく人々を扇動し、ベルとモーリスを自宅の地下室に幽閉してしまう。城からベルの服のポケットに隠れてやってきたポット夫人の息子、ティーカップのチップの機転で脱出した二人は大急ぎで城へと引き返す。

絶望の底にある野獣はガストンに痛めつけられるが、駆け付けたベルの声を聴き反撃、逆にガストンを追い詰めたものの命は助ける。屋根を伝ってバルコニーに上り、ベルと念願の再会を果たした直後、背後からガストンが短剣を野獣の脇腹に突き立てる。ガストンは落下して命果てたが、野獣もまた虫の息に。愛と別れの言葉を発し事切れた野獣の亡骸にすがり、ベルは涙を流して野獣への愛を告白する。悲しみの中、空から流星が振りそそぎ、野獣は光に包まれながら元の人間の王子だった頃の姿に戻った。



ベルの愛の告白により、ついに野獣は試練を乗り越え、自身と城にかけられ

た呪いを解かれ、二人は末永く幸せに暮らすのだった。

(2) 曲について

題材がフランスということもあって、曲想は全体的にアメリカ人が思い描きそうなフランス風です(いつかやった「ノートルダムの鐘」もそうだったかも……)。説明は難しいですが、さしずめ「ヨーロッパの田舎風の素朴さが抜かれて華やかそのもののお城になり、ちょっと斜に構えたエスプリが弱くて直情的」ってところでしょうか。そのまま演奏してしまうと洋風演歌!になるリスクがあるのはまさしくそういうところで、特に2拍子のところは(ポップスだと思わずに)少しクラシック風に音符を取り扱ってみると品格が出てくるかもしれませんね。

3 クリスマスソング・オンパレード!

さあてお待ちかねのクリスマスソング! **ホーッ、ホッフオッフオッフオッフ...**(しかしこう書いちゃうと、サンタ📺というよりもバルタン星人(W)o¥o(W)によるコンビニの歳末スピードくじみたいで嫌ですが……)。曲はみんな知っているも、案外と曲名や謂われを知らないことがあるので、演奏会メニューに載っている曲を歳末(在庫一掃)セールでご紹介!

a. ウェストミンスター・コラール(*Westminster choral*)

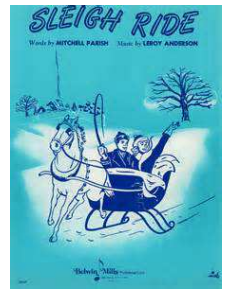


いきなり聞きなれない名前ですが、巷により流布しているのは「*Angels we have heard on high!*」(「天に響く天使の声」とでも訳しましょうか)、日本だと「荒野の果てに」というタイトルで知られているクリスマスキャロルです。もとは18世紀頃のフランスの聖歌が19世紀前半に「*Les Anges dans nos campagnes*」となり、これがイングランドに紹介されたようです。

歌詞の内容を眺めると、キリストが生まれて良かったよかった、ありがたい御子を崇めようという調子ですが(まあキャロルは大なり小なり同じですな……)、印象的なのは途中のやたら長い「*Glo-ooooo-oooo-oooo-ria*」ってところ。ここは実はラテン語で(道理で日本語版でも同じわけだ!)「*Gloria, in excelsis Deo!*」、**「至上の神に栄光あれ」**というくらいの意味です。

b. そりすべり(*Sleigh Ride*)

アメリカの作曲家ルイ・アンダーソン(Leroy Anderson)の楽しくなる名曲(1948年作曲)。実はアメリカはコネチカット州の夏の別荘で、「同名の曲をモーツァルトが作ったように、冬のそりすべりを想像して」(彼の奥さんの回想曰く)作曲されたらしいです。そして初演はあのボストン・ポップス!最後の鳴き声(1stCorの最大の見せ場)はトナカイではなく馬ですよ!(因みに私の大学時代の吹奏楽部が毎年12月に定期演奏会で、アンコールの締めはいつもこの曲でした……(懐かしい)) (なお、W. モーツァルトの「そりすべり」は1791年作曲の「三つのドイツ舞曲」K605第3



楽

章

。

<http://www.bing.com/videos/search?q=wolfgang+mozart+sleigh+ride&FORM=HDRSC3#view=detail&mid=DA31877449C6165CFF01DA3187744>

[9C6165CFF01](#) 参照。おなじみの「あのそが一ぬの音」が聞こえますが、百五十年前だとそりのテンポも遅いですね!)

c. ウィンター・ワンダーランド(*Winter Wonderland*)

1934年にリリースされたリチャード・B. スミス(Richard B. Smith)作詞、フェリックス・ベルナルド(Felix

Bernard)作曲のアメリカン・ポップス。スミスさんはペンシルバニア州のリゾート地ホーンズデール(Hornsedale)(地元らしい)にある中央公園の冬景色を見て一気に書き上げたそう。このホーンズデール、実は何とアメリカで最初の蒸気機関車が走ったところですよ！

d. 神の御子は今宵しも(*Adeste Fideles*)

この曲は結構古そうですが(13世紀には書かれていたとの説もあり)作者不詳。やれポルトガル王家の象徴として使われたとか、イングランドのカトリックで1688年の名誉革命(オランダから王家を招いてイギリス国教会へ改宗)に反対する派閥であるジャコバイト(*Jacobites*)のテーマソングになったとか、ややこしい逸話だらけ。

e. もみの木(*O Tannenbaum*)

何かお菓子みたいな名前で察しが付くかもしれませんが、もとはドイツ北部の民謡に18世紀末くらいにヨアヒム・アウグスト・ツァルナック(*Joachim August Zarnack*)とエルンスト・アンシュッツ(*Ernst Anschütz*)が共同で歌詞をつけたもの。曲の方はアメリカのメリーランド州・アイオワ州の州歌、コーネル大学の校歌、そして何とイギリス発祥の労働・革命歌「赤旗の歌」と同じとか!? (写真はドイツ・ローテンブルク(*Rothenburg*)の雪のクリスマス市)



f. 御使い歌いて(*What Child Is This?*) (グリーン・スリーブス) (*Green Sleeves*)

ご存知「グリーン・スリーブス」は16世紀に遡るイングランド伝承の恋歌(つれない女性への恨み節)です(なんと、かのシェークスピアの戯曲にも名前が登場するくらい当時流行っていたらしい)。吹奏楽でもホルスト第二組曲とかいろいろな採り上げられ方をされていますね。キャロルとしては1865年に歌詞がつけられた、実は歴史の新しいもの。

g. きよしこの夜(*Silent Night*)



実はこの曲ももとはドイツ語です(*Stille Nacht*)。1818年12月24日、オーストリアのオーベンドルフ(*Obendorf*)の教会で、パイプオルガンが急に鳴らなくなったため(ネズミにオルガンがかじられたせいとか?)、ヨゼフ・モール(*Josef Mohr*)が急遽作詞し、フランツ・クサーヴァー・グルーバー(*Franz Xaver Gruber*)に「この歌詞に合うギター曲を作曲してくれ」と依頼(だいぶ無理な依頼ですが...)、一晩考え抜いて曲が完成し、クリスマス本番に初演されたというエピソードがあります(本当に一日でできたかどうかは怪しそうですが...)。写真はこの曲を語るときに必ず採り上げられる現地オーベンドルフのチャペル。英訳の作者は不明のようです。

h. 牧人羊を(*The First Nowell*)

17世紀より前からイングランド西部に伝わっている民謡を1833年にウィリアム・サンディーズ(*William Sandys*)がフィーチャーし広まりました。イギリスの民謡にしては旋律の二回反復は珍しいようですが、シンプルな力強さからか、アメリカで好まれているとのこと。

因みにアンコールのうちベートーベン(*Ludwig van Beethoven*)の第九(交響曲第9番)は、日本では年末の超定番曲ですが、欧米では特にクリスマスの季節ものではありません(再生・博愛・式典に結び付けられ

ることが多いので、結果的に春によく聴くような印象すらあります。余談ながら第九演奏会は私の母校の高校で今も続く伝統行事（プロの指揮者・ソリスト・オケとやります）なのですが、演奏会はいつも4～5月です。この純和風の慣習は終戦直後からのNHK交響楽団による年末演奏が定番化したものであることはよく知られていますね。